

2022年2月6日 説教『イエスの譬え』

高橋克樹牧師

サムエル記下12章1〜13節a、マルコ福音書4章10〜12節、21〜34節

「種蒔き」の譬えは、共観福音書すべてに出てくる有名な譬えです。おそらく史的イエス自身にまでさかのぼれるもので、イエスが何を考えていたのかを類推できる素材でもあります。ただ、エルサレム教会に代表される原始教会は、これを解釈し直しているのです。その意味でも興味深いテキストなのです。歴史上のイエスが本来どのようなように語ったのか。その内容は次のようなものと想定されています。4章3〜8節までのテキストと比べて下さい。

種蒔く者が種蒔きに出かけた。蒔くなかで次のことが起こった。ある一粒の種（単数）は道端に落ちた。鳥たちが来て、それを食べた。別の一粒の種（単数）は岩地に落ちた。太陽がのぼったとき、焼き枯れた。別の一粒の種（単数）は茨の中に落ちた。その茨は伸びて成長し、その種を窒息させた。そして、実は結ばなかった。別の多くの種（複数）は、良い地に落ちた。そして、実を結んでいった。伸び上がり成長しながら、30倍、60倍、100倍の実りをもたらしていった。

以上のような内容だったと想定されています。種は「落ちた」というだけで、その場所が4通りであったのです。最初の3つには妨害要素があらわれています。道端、岩地、茨の中、それらの場所ではまず鳥が食べ、次に太陽が枯らし、茨が種の成長を阻害して実を結ばなかった。ただ、それらの種は単数なので、一つの種です。ある意味で、前半は死が描かれ、後半では生のことが描かれ、コントラストになっているのです。

前半は、種の落下、妨害要素の登場、種の死、というストーリーでした。後半はそれとは違って、「実を結んでいった」というプロセスが最初に語られます。伸び上がり成長して行く姿が語られていきます。さて、10〜12節は種蒔きの譬えを用いて話す理由について書かれた箇所です。ここでイエスは12弟子とイエスの周りの人々には、神の国の秘密が打ち明けられているが、それ以外の人々にはすべてが譬えで語られると断言しています。譬えという語（マーシャル）は本来「謎」を意味している言葉です。神学校に入らたての1年生の時に川島先生が教えてくれてすごくびびくりしたことを覚えています。イエスの譬えは分かりやすく私たち人間に語るための物だという先入観を持っていましたから。こういう驚きの連続が神学を学ぶときのモチベーションになっていくのです。

10〜11節を読んでみましょう。それによると、12弟子などイエスの身近にいる人たちには神の国の奥義が解き明かされるのですが、それ以外の人々には神の国の福音が謎のままであると言うのです。これは初代教会が成立してい

く過程で12弟子の権威が強くなっていったなかで、一般の信者に対して12弟子たちの優位性を強調される目的で、この「種蒔き」の譬えが用いられたのです。

さて、本日のテキストではありませんが、3〜9節の「種蒔き」の譬え自体を取り上げてみましょう。ただ、この箇所は来週の聖書日課で指定されている箇所なので、その時に詳しく述べます。この譬えは実際にイエスが生前に語られた譬えで、初代教会が発生したエルサレム教会に伝えられていたものです。

洗礼者ヨハネが神の国は終末時に、厳しい審判と悔い改めの中で実現すると主張したのに対して、イエスはむしろ神の国は誰にでも与えられる「恵みと祝福」にほかならないと言ったのです。洗礼者ヨハネの神の国観によれば、人間は神の国実現のためには悔い改めて自律的な行動を起こす必要があるのです。しかし、イエスが語ったのは、神の国はすでに人間の手の届く範囲内に到来しているものであって、すぐく身近なものになっていると語っていたのです。だから神の恵みは既に人間の生活世界の中に到来しているのです。このことを表現するために種蒔きの譬えが用いられたのです。

ですから4節の道端、5節の石だらけの土、7節の茨の中に落ちた『種』は単数形で実りをもたらさないのですが、多くの実りをもたらす8節の良い地に落ちた『種』は複数形なのです。つまり、福音を受け取る信仰者が良い地であるならば福音は多くの実を結ぶというのです。4章26〜29節で言われていることは、神の国はある人が大地に種を蒔いたら、種はおのずと芽を出して伸びていく。そのことを当の種を蒔いた人は知らないし、無関与のままなのに、大地がおのずから実りをもたらすことが強調されています。しかも良い地に落ちた種は30倍に、60倍に、100倍にもなったのですが、この8節の動詞は未完了過去形になっているので、いま成長が継続している途中のこととして描かれています。それは12弟子が中心となってきたエルサレム教会にイエスが福音の種が蒔かれて、今まさに福音の種が順調に成長しているけれども、それは12弟子に福音が成長する良い地としての福音が蒔かれたからである。このように、エルサレム教会は、自分たちの教会（＝良い土地）属する人間のみが救われると解釈していた可能性が高いのです。3節と9節で聞くことが強調されているが、それは一般論として福音を聞くことではなくて、「エルサレム教会の主張をよく聞け」という閉鎖的で権威的な姿勢の現れと考えることができるのです。10節のよると、『イエスがひとりになられたとき』『十二人と一緒にイエスの周りにいた人たちが、たとえについて尋ねた』という状況設定になっています。イエスが一人になったときに親密な関係性の中にある者たちが福音の真理を聴くことができるのだという表現になっていることに注目してください。大した人間関係がないのに『その人のことを知っている』と言う人が良くいますが、この表現

はイエスとの親密性を盾にとった特権性を主張している臭いがします。自分たちだけがイエスが語った、神の国の奥義を知っているという自負心が見え隠れします。

自分たちエルサレム教会に属する者たちには神の国の奥義が知らされているが、『外の人々』にはその奥義は決して知らされず、滅びに至ると言うのです。実は3章31〜35節でもマルコ福音書記者は、イエスの身近な人の代表としては母、兄弟姉妹たちと、神の御心を行う人を比較して、イエスの「身近にいる人」と「外の人」の立場を逆転させているのです。ですから、マルコ福音書記者は4章13〜20節で、そのようなエルサレム教会の権威主義に対して暗に反論を試みているのです。13節で「この譬えが分からないのか」という言葉には、1〜12節までをイエスの譬え話として語り伝えているエルサレム教会の権威主義的な種蒔きの譬えの解釈に対して、反論を開始している言葉なのです。13〜20節によれば、神の国の奥義はエルサレム教会だけに明かされたものではなく、御言葉を聞いて受け入れる人たちに伝えられるのであると主張することで、エルサレム教会の権威主義的な解釈にNOを告げているのです。マルコ福音書がイエスの宣教開始後に数々の癒しの業を為していますが、そこで癒された遊女や徴税人、皮膚病の人たち、飢えている人といった、今まさに生きることにおいて困難を抱えている人のところに神の国は来ているのだということを告げているのです。イエスが言う神の国の到来は終末時の恐ろしい審判の末に到来するものではなく、農民たちが作物を作って、その恵みとして豊かな収穫が与えられることに似ていると言うのです。エルサレム教会のように特権的に福音が保持されているのではないということです。マルコ福音書記者は7章18節でも『そんなに物分りが悪いのか」と弟子批判をしています。それもマルコ福音書記者の問題意識と同じです。4章14節以下では、種を蒔く人というのは、イエスのもたらした福音の言葉を蒔くということだ。しかし、良い地といわれるエルサレム教会だけがそれを独占することにマルコ福音書記者は抵抗しているのです。

イエスが受難予告をする8章31節以下を見て下さい。33節『イエスは振り返って弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」。』と、12弟子筆頭のペトロを叱責しています。4章15節にもサタンが『蒔かれた御言葉を奪い去る』と出てきます。ここでもイエス自身がエルサレム教会の指導者ペトロをサタンと名指しして批判しているのです。これはただ単に12弟子たちの無理解が問題とされているのではなくて、初代教会における12弟子の権威台頭に対するマルコ福音書記者の批判が反映されているのです。

実際、マルコ福音書では、12弟子たちはイエスの三度の受難予告を誰も理解

できませんでしたし、イエスの逮捕直前には全員が逃げてしまします。ペトロも三度否みます。4章21節以下でも弟子批判が展開していくのです。せっかくイエスがもたらしてくれた福音という「ともし火」をわざわざ升の下や寝台の下に置くだろうか。これはエルサレム教会が福音を独占していることへの非難の言葉です。福音は燭台の上に置いて、世界という部屋を明るく照らすためのものがある、というのです。エルサレム教会の直弟子たちの姿勢は、福音を升の下や寝台の下に置くのと同じだ。そうではなく、イエスの福音は闇の中に生きるすべての人のために用いられるべきものだというのがマルコ福音書の隠れた主張なのです。

イエスの福音を本当の意味で聞き入れ、実を結ばせる福音を『持っている人』（24節）は三十倍、六十倍、百倍ものものが『更に与えられ』（25節）るが、エルサレム教会の人たちは『持っているものまでも取り上げられる』（同）というのです。

26節以下ではエルサレム教会が神の国の到来を奥義として秘かに保有されるものではなく、むしろ人間が現実世界で経験している「収穫」のと同じだというのです。農夫が蒔く種はそれ自体で成長し、大地はおのずから実を結ばせる。農夫もどうして種が成長していくかの自然の摂理を厳密には知らないように、神の国もまた人間の意志を超えた恵みの出来事として到来するものだというのです。30節以下では、神の国はからし種のようなもので、福音を受け入れる人間がたとえどれほど小さな存在であっても、また、この世的な評価では劣っているとしても、やがては福音を成長させていく潜在的な生命力が種にはあるというのです。

このように種蒔きの譬えを見ていくとき、種としての私たち人間の潜在力を用いるのは、実は隠された神の意志だということです。神が土の器である私たちをどのように用いるのか。私たち一人ひとり神の御業が働く器です。その私たちが人間が福音を受け入れるところに、神は豊かな実を結ばせるのです。私たちは、ともすれば、道端、石ころだらけの地、茨に覆われた地であることを嘆きがちですが、イエスが本来語られた種蒔きの譬えは、福音を受け入れるならば、それがどんなにひどい場所であっても、自然の法則によって作物が収穫されるような実を結ぶのであるという宣言だったのです。たとえ、人間の側が徴税人や遊女、罪人だとしても、そのような人間的な価値判断には左右されないのだということです。ただ、福音を受け入れる心さえあれば神の国（＝神の支配）はその人に実現するのだというのがイエスが語った福音なのです。

神の支配が実現するというのは、その信仰者の人生の歩みに神の導きが現わされているのだから、その恩寵に気づいて生きていくことが神の国に生きることだということなのです。

